

再スタート2年目の“Fukuoka”、それぞれの挑戦

⑤オセアニア、アジア勢も福岡から世界へ

●ナショナルレコードで自国の歴史を刻んだブレット・ロビンソン（オーストラリア）

昨年の福岡国際でロビンソンは2時間07分31秒のオーストラリア新記録を打ち立てた。

これは停滞していたオーストラリアの男子マラソンの歴史を動かしたという大きな意味があった。オーストラリアは世界初の2時間10分突破と、2時間9分突破を達成した国である。以下のように世界記録を3回更新した。

1967年12月：福岡国際でデレク・クレイトンが2時間09分36秒4（※マラソンの記録は10分の1秒単位で公認されていた時期があった）

1969年5月：オランダ・アントワープでクレイトンが2時間08分33秒6

1981年12月：福岡国際でロバート・ドキャストセラが2時間08分18秒

3回の更新のうち2回が福岡国際で、オーストラリア選手と福岡国際は縁（ゆかり）が深い。オーストラリア記録は86年にキャストセラが2時間07分51秒と更新し、80年代後半から90年代にはスティーブ・モネグッティが五輪&世界陸上でメダル1個、入賞4回と活躍した。

しかしその後はアフリカ勢を中心とする世界の進歩に、完全に置いて行かれてしまった。オーストラリアには2時間9分を切る選手すら現れなくなった。

そこに登場してきたのがロビンソンだ。昨年10月のロンドン・マラソンを2時間09分52秒（8位）で走り、ハーフマラソンでも20年に59分57秒のオーストラリア記録を出していた。5000mのタイムも偉大な先輩たちより速い。昨年の福岡国際では先頭集団でレースを進め、4位ながらオーストラリア記録更新を見事に達成した。

「何度かナショナルレコード更新に挑戦していたのですが、失敗していました。ようやくマラソンで良い走りが出て大変うれしかった」と昨年の走りについてコメントした。

マラソンは今回が11回目、昨年の福岡国際は8回目の出走だった。19年ロンドンで2時間10分台を出している。その後はオーストラリア記録を常に意識してきたのだろう。昨年の福岡国際はロビンソンにとっても、なかなか破れなかった自身の殻を一気に突き破った意味のある大会となった。

●今年はさらに成長した姿を

ロビンソンは「福岡は速い（記録を出しやすい）コースで、オーストラリアからの移動も（他大陸への移動と比べ）しやすい。それに日本食が好きなんです」と2年連続での参戦を決めた。

「福岡国際に向けて12週間、集中してきました。11月にはフォールズクリーク（オーストラリアの高地トレーニング拠点）で高地練習を3週間行いました。昨年よりも良い状態です。ペースメーカーが上手くイーブンペースを作ってくれたら、残り10kmをどれだけ速く走れるかにチャレンジします」

目標達成にはトレーニングはもちろんのこと、ロビンソンのスピードがカギを握る。

「20年の丸亀でハーフマラソンを59分57秒で走っています。マラソンの中間点を63分00秒で通過してもリラックスできているので、後半で強さを発揮できます」

中間点を過ぎてからも表情や走りに余裕があれば、30km 過ぎにロビンソンがスパートする。「昨年よりも状態は良い。2時間6分で優勝したい」と好調をアピール。昨年よりもレベルが高くなる優勝争いで、主役の1人になりそうだ。

●アジア大会銅メダルの楊紹輝（中国）も参戦

中国からもトップ選手が福岡にやって来る。楊紹輝（中国）は10月5日に行われた杭州アジア大会銅メダリスト。2カ月の間隔で福岡国際に出場する理由を「今年は好調が続いています。日本はマラソンに強い国ですので（日本のレースに）挑戦してみたい」と考えたからだという。「日本のレベルが高いので、日本人選手たちと競り合うことで自分へのチャレンジをしたいと思います。可能であれば、お互いに引っ張り合うような形のレースにしたい」と意気込む。

楊は今回の福岡国際が24回目のマラソンと、多くのレースを経験してきた。

今年もすでに5レースを走っている。3、4、5月に中国国内の大会を3連戦し、2時間07分49秒、2時間12分37秒、2時間10分12秒というタイムを残した。8月の世界陸上ブダペストは2時間17分12秒で38位。そして世界陸上から5週間の間隔で出場したアジア大会は、2時間13分39秒で銅メダル。優勝は中国記録を持つ何杰（中国）で、2位は北朝鮮選手。楊は2時間6～7分台を持つアフリカ出身選手や、日本の2選手に先着した。

持ち前の“持久力”が国際大会では武器となってきた。「持久力には自信がありますが、スピード面はあまり得意ではありません」と楊は話す。19年世界陸上は20位、21年東京五輪は19位と、ハイペースにならない世界大会では持ち記録以上の好成績を残した。今年のアジア大会も勝負優先の国際大会だった。

しかし、普通の選手は着順で好成績か否かを判断するが、楊は記録を自己評価の基準にしている。「母国開催のアジア大会で銅メダルを獲得できたことは嬉しいのですが、2時間11分台を想定していたので2分以上遅かったんです。タイムには満足していません」

「私の目標はシンプルで、自分自身を超えることです。よりよい結果を出すことと自己ベストを更新していくよう努力していますし、それが長年にわたって私が目指していることです。福岡国際でも順位の目標は設定していません。自分自身をブレイクスルーし、自己ベストを更新したい」自己記録は今年3月にマークした2時間07分49秒で中国歴代2位。中国記録の2時間07分30秒の更新も視野に入る。